

# 排他と歓待の分水嶺

—— ヒンドゥー女神寺院におけるヒジュラへの贈与行為に関する考察 ——

國 弘 暁 子

Giving away at a place of Hindu pilgrimage of Gujarat, India.

Akiko KUNIHIRO

## I. 目 的

インド、グジャラート州のマヘサナ県に位置するヒンドゥー女神バフチャラー寺院では、世俗の規範から外れた者との烙印を押されたヒジュラが、女神に帰依する者としてその聖地に居続け、その地を巡礼する者たちと係わり合う。本稿では、女神を信仰する巡礼者と、その女神に帰依するヒジュラとが係わり合う女神寺院の歴史的背景と、両者の直接的な接触をもたらす贈与という習俗の意義を明らかにすることを目的とする<sup>1</sup>。

## II. ヒジュラに関する先行研究、及び「第三」への批判

### 1) ヒジュラに関する先行研究

ヒジュラ (*Hijra* 英)、あるいはヒジュラー (*Hijrā* ヒンディー) とは、男性と女性のカテゴリーから外れた特異なジェンダーとして有徴化され、とりわけその逸脱性が称揚される場合には「第三のジェンダー」と表象されてきた。

「第三のジェンダー」としてヒジュラがジェンダー研究の俎上で注目を浴びるのは、アメリカの人類学者セレナ・ナンダ (Serena Nanda) の民族誌に端を発する [Nanda 1999]。西洋社会における強固な男女二元論に異を唱えることを目的に、ナンダは「第三のジェンダー」あるいは「もう一つのジェンダー役割」としてヒジュラを表象し、二元論の普遍性を覆しうる可能性を示そうとした。しかし、後の研究者からは、特殊なセックス／ジェンダーとしてヒジュラを特化してしまう見方への異論が出される。たとえば、ローレンス・コーエン (L.Cohen) は、ジェンダー／セクシュアリティの問題だけでなく、宗教、親族、階級といった様々な差異の問題との関連に着目することの重要性を説き、そのコーエンの主張を引き継ぐかたちで、ガヤトリ・レディ (Gayatri Reddy) は、複数の差異軸が交錯するヒジュラの日常の側から、外部からの押し付けである「第三」カテゴリーへの異議を主張する [Cohen 1995; Reddy 2005]。レディの民族誌では、ヒジュラをホモエロティックな世界の中に位置づけており、結果的に、特殊なセックス／ジェンダーという表象に還元されている点は否めない。

---

1 本稿は、日本文化人類学会第47回研究大会 (2013/06/09 慶応大学) で発表した原稿「排他と歓待の分水嶺：ヒンドゥー女神寺院における贈与に関する調査研究」に修正加筆したものである。

## 2) 「第三」への批判

「第三」という数字の使用に批判的なキャス・ウェストン (Kath Weston) は、「第三」の導入によって、ジェンダーに関する議論が生物学的な差異にもとづく身体の問題へと回帰する点を指摘する。第三、第四のジェンダーを発見してきた民族誌的な探究では、たとえば、ヒジュラは正常に機能する男性器を欠いていることから「第三」のカテゴリーにあてはめられ [Nanda 1999]、また、北米のベルダーシュは、通常の男女とは異なるが、そこから派生した特別枠として「第三」「第四」のカテゴリーに設定される [Roscoe 1996]。このような生物学的な男女差への執着に対抗する策として、ウェストンはゼロ概念としての「アンセックス化 “unsexed”」の導入を提唱する。

アンセックス化とは、一つ、二つと数えられる具体的なジェンダー主体を対象とせず、ゼロの概念と同様に、非存在論的な意味でのジェンダーを提示する。それは、個別のジェンダーが喪失していることを感知できる束の間の瞬間を示すサインとして機能し、そこにはジェンダー主体としてはカウントされない、別の存在が認知される文脈が開かれると、ウェストンは主張する [Weston 2002: 40-3]。つまり、ウェストンが掲げるアンセックス化とは、ジェンダーの二形性そのものを無効とするものであり、さらに、身体の問題へと回帰していく「第三のジェンダー」議論の批判にも結びつく。

このウェストンによるアンセックス化の主張をヒジュラに関する議論に適用する場合、それは、ヒジュラがジェンダー主体としてカウントされない束の間に焦点を当てることになり、それによって、特殊なジェンダー主体、つまり「第三のジェンダー」としてヒジュラを切り取ることを回避することが可能となる。特殊なジェンダー主体としてカウントされない束の間とは、贈与という行為を通じて、ヒジュラと日頃関わることのない人々が、ヒジュラにアプローチする場面においてである。その束の間においてなされる贈与とは、複数の解釈の余地をもった行為であり、女神寺院の歴史とも結びついた慣習である。次章では、贈与が行われる聖地の歴史と、ヒジュラが聖地に存在することの正統性を明らかにする。

### III. ヒジュラの存立を支える固有な場所と歴史

#### 1) ヒジュラに相当する複数の名称

本稿で用いるヒジュラ (*Hijra*) という名称は、インド全土において使用されるものではなく、ローカルな文脈から離れ、研究領域において確立された通称と呼ぶにふさわしい。たとえば、北のヒンディー語圏ではヒジュラー (*hijrā*) やキンナル (*Kinnar*)、南のタミル語圏ではアリ (*Ali*) やアラワニガル (*Aravanigal*) というように、地域ごとに異なる名称で知られている。

インド北西部のグジャラート地域では、ファータダー (*fātadā*) やウィヤンダラ (*vyāndhala*) という名称が一般に用いられる。ヒジュラに対する評判は場所によって異なり、とりわけ都市部においては、ならず者と陰口を叩かれることもしばしばである。それに対して地方では、一住民として近隣の住民たちに受け入れられていることも多々ある。また、バフチャラー (*Bahucharā*) 女神寺院においては、ヒジュラと遭遇する巡礼者は畏怖の念をもって接している。女神寺院のある北グジャラートで活動するヒジュラは皆パーワイヤー (*pāvaiyā*) という称号をもつが、その称号によって、南部で活動するヒージャダー (*hijadā*) の称号をもつ者たちとの帰属の違いが示される。

#### 2) バフチャラー女神寺院とカマーリヤ・カースト

グジャラート州の北西部に位置しているバフチャラー女神寺院は、グジャラートのシャクティ・ピタ [*Shakti·pita*: 女神の土地] の一つに数えられる有名な巡礼地である。そこはかつてガーエク

ワード (*Gāekwād*) 王国の領土であり、マナジラウ・ガーエクワードが王の座にあった18世紀に、巨大な石造りの神殿が女神のために建立された。そして、女神寺院の管理と維持の仕事は、近隣のカルリ村に住むガラーシヤ [*Garāshiyā*：ラージプット] と、シャンカルプール村のカマーリヤ (*Kamāliya*) に任されていた。金銭によるアーワク [*āvak*：収入] のなかった時代、女神寺院の灯り [*ディヲ*：*divo*] を点すためのディヴェリヤ (*diveliya*) として落花生の油や穀物が女神寺院に取められており、ガラーシヤとカマーリヤはそれらを管理していた。寺院に賽銭箱が置かれるようになってからは、そこに集まる金銭を、寺院の管理費、乞食や托鉢遊行僧への食費として振り分け、その残りを、両者の間で分け合っていた。しかし、その配分を巡る争いが絶えなかったため、1877年に、両者が受け取る割合を、ガラーシヤが10の割合に対してカマーリヤが6と定められた。アナとは旧貨幣の単位のことであり、16アナが1ルピーに相当する<sup>2</sup>。

現在では、バフチャラー女神寺院はグジャラート州政府の管轄下に入っており、実質的な運営や管理は「バフチャラー女神寺院公益信託」によって行われている。寺院の管理体制が変わった今日においても、かつてその中枢にいたカマーリヤの多くは、女神寺院との係わりにおいて生計を立てている。遠方から来た巡礼者たちを誘導することで金銭を稼ぐ者もいれば、寺院境内の外で商売を行う者もいる。

### 3) 両性具有神とヒジュラ

女神の世話役であると今日も主張し続けるカマーリヤは、プジャーラー (*Pujārā*) という称号を持ち、その昔は、半身男性、半身女性の衣装を身に纏った現世放棄者であったと自ら語る。そのかつての様相について語るとき、カマーリヤは半身シヴァ神、半身パールヴァティ女神の姿をした両性具有のアラダナーリーシュワラ (*ardhanārīśvara*) について言及する。アラダナーリーシュワラ、あるいはアラダナリとは、男性性と女性性とをひとつの統一体として具現化した神の姿である。それは、しばしばヒジュラがインド社会で受け入れられる根拠として取り上げられる神話のモチーフである [例えば Pande 2004; Nanda 1999]。

ヒジュラとして生きる者たちは、自らをアラダナリに重ね合わせることはしないものの、かつてアラダナリの様相をしていたカマーリヤとは特別な関係にあったと認識しており、今日においてもカマーリヤと付かず離れずの関係を保っている。カマーリヤに属する人々も同様に、カマーリヤの一人からは、ヒジュラとの関係の由来について、次のような言い伝えを聞かせてもらった。

「パーワイヤーはパキスタンからグジャラートのT村にやってきた。当時のT村は二つの王権領土の境目に位置していた。その二つの領土の兵士たちが、パーワイヤーを利用して性的欲求を満たそうとしていた。パーワイヤーたちは、女神の衣装を汚さないために自ら命を絶たざるを得なかった。自害せずに村を逃げ出した5人のパーワイヤーは、グジャラートで各自の拠点を築いた。そのうちのひとつがバフチャラージであった」(2007年8月17日)。

ヒジュラたちが住んでいたT村とは、現存する村であり、そこにおいて、今から700年ほど前のこと、125人のパーワイヤーが地中に埋まったと、今でもヒジュラたちの間では語り継がれている。自ら地中に埋まって命を絶った理由として「女神の衣装を汚さないため」と表現するが、それはヒジュラ

---

2 1910年にガラーシヤが保有する10の権利がバーロットへ委譲(バーロット10 カマーリヤ6/ガーエクワード政権によって1943年に発行された資料『バフチャラー女神の賽銭管理における規定』を参照)され、さらに、1954年には独占権(イジャラ)の制度そのものが廃止される。

が纏うサリーが女神の衣装であること、そして、ヒジュラが女神の帰依者であることを意味している。T村を逃げ出した5人のうち、バフチャラー女神寺院の地に逃げてきた者は、女神の世話係をしていたカマーリヤによって受け入れられたという。

その当時のカマーリヤは、女神寺院の周辺村落から穀物の一部を年に一度の収穫時期に徴収する<sup>3</sup>ハック〔*huk*：権利〕<sup>4</sup>を持ち、また、それら農村地域に住む人々から、人生儀礼の折に贈与と食事を提供してもらう慣習があった。カマーリヤが農村地域に直接赴き、収穫物の一部を受け取る仕事に同行していたのがヒジュラであり、村人から受け取った穀物を運ぶ役目をヒジュラが担っていたという。

今日に生きるカマーリヤは、現世放棄者としてのサインであったアラダナリの様相を纏うことはなく、寺院運営における中枢からは外され、村々から収穫物を受け取る権利も放棄している。それに対して、かつてはカマーリヤに従う立場にあったヒジュラの方は、女神の衣装としてのサリーを身に纏い、カマーリヤに代わって穀物や野菜を農民たちから徴収する権利を確保している。また、寺院の境内では常に異彩を放つ存在として巡礼者たちから注目され、男児の剃髪儀礼のために訪れる巡礼者たちから恩寵を求められる立場に在り続ける。

#### IV. 贈与を介した女神への架橋

バフチャラー女神寺院には、子宝祈願や治癒祈願など、人生における様々な問題を乗り越えるための祈願を行う人々が遠方から多数訪れている。その巡礼者を目当てに、毎朝寺院の境内には10名ほどのヒジュラが集結する。ほぼ毎日寺院に姿を現すのは、寺院の周辺に居住している者たちであり、週末や寺院の縁日など、巡礼者の数が多い時だけ女神寺院に遠くからやってくる者もいる。以下では、女神寺院における祈願のプロセスを示し、その上で、ヒジュラと巡礼者との遭遇のあり方、及び、巡礼者とヒジュラとの間に一時的に生じる社会的な位置関係の融解と、新たに形成される関係のあり方、さらに、その両者の間で取り交わされる贈与の意義について論じる。

##### 1) 対他的なポジショニング

女神寺院を訪れる巡礼者は、まず寺院境内の中央に位置する神殿に入り、女神像の前まで進み、賽銭箱にパイサ〔*paisa*：金銭〕を投げ入れてから女神に祈りを捧げる。その賽銭箱はダーナの箱と呼ばれ、任意の額のパイサが投げ入れられる。男児の人生儀礼の一つである剃髪儀礼の遂行を目的とする場合は、神殿に入る前に儀礼用のチケットを購入しなければならない。そのチケットを持って神殿内の女神像の前まで進み、チケットを手渡した司祭によって男児の頭髪の一部が切り落とされる。その頭髪の一部はラット (*lat*) と称され、女神に捧げられるが、この捧げものは子宝を授けてくれた女神に対するお礼の一環として捧げるものである。

神殿における祈願が終わると、大概の人々は裸足のまま外に出て、神殿の周りを一周する。その動線上で、境内の裏門に近い神殿の西側で地面にあぐらをかいているヒジュラと遭遇する。巡礼者たちは見ず知らずのヒジュラの存在を恐れながらも、畏怖の態度をもって歩み寄り、そこで己の頭を垂れて、ヒジュラから言祝ぎを受ける。さらに、ヒジュラの身体の一部を己の手で触れるという

3 動詞のウグラワーウ *ugarāvavū*

4 カマーリヤの権利とは、ギラーシュ (*girāsh*) と呼ばれていたもので(『バフチャラー女神の起源 (*Shri Bahucharāji Utpatti*)』p30、1933年、著者 Kavi Shokhina Unjāvālā)、ギラーシュ、あるいはガラーズ (*garās*) とは、生計のために与えられる土地を意味する。

仕草を通じてヒジュラから直接有り難い恩寵を授かろうとする者もあり、そして、彼らは任意の額のパイサ（貨幣）をヒジュラの一人に、あるいは全員に手渡し、立ち去って行く。

このように、巡礼者の方から差し出された任意のパイサを、ヒジュラがそのまま受け取ることもあれば、一定の額以上のパイサを受け取るハック（権利）をヒジュラの側から主張する場合もある。それは、男児の剃髪儀礼や結婚など、人生儀礼のために訪れた巡礼者と遭遇した場合であり、「バブリー〔*baburi*：乱れた髪〕のパイサをよこさないさい」という台詞と共に、ヒジュラはパイサを請求する。ヒジュラが徴収権を主張するのは、カマーリヤと共に活動していた頃から続く慣行である。そして、その徴収がなされるや否や、脇で構えていたカマーリヤの男性も姿を現して、ヒジュラと同じ額を巡礼者に対して請求することもある。ヒジュラとカマーリヤとが期待する受け取り額は51ルピー、あるいはそれ以上であり、巡礼者が手渡す額がそれを下回った場合には、ヒジュラは受け取りを拒否して相手に突き返す。パイサを突き返されると巡礼者たちは、ヒジュラが満足するようにパイサを上乗せし、一連の儀礼をつつがなく終わらせようとする。そしてカマーリヤたちも、ヒジュラが受け取った額と同じパイサを請求するため、巡礼者の後を追う。

ヒジュラは単にパイサを徴収するだけでなく、巡礼者に対して有り難い恩寵を授けることも欠かさない。この恩寵とはアーシールワダ (*āshīrvāda*) と言われるもので、人生を良き方向に切り開こうとする人々にとって必要なものと地元の人々の間では考えられている。アーシールワダの授与というのは、例えば、親から子供へ、教師から生徒へと、目上にあたる人から、もう一方の側へというように、その場における二者の関係性によって授与される方向が決まる。よって、その授与は決して双方向ではあり得ない。

アーシールワダは現世に生きる人々の間でのみやり取りされるのではなく、神々からも授けられる。女神の聖なる土地を目指す人々は、女神からアーシールワダを受け取ることを主たる目的としており、女神への祈願が後に成就した場合には、「女神のアーシールワダが得られた」と表現する。このように、女神と係わり合うことを切望する巡礼者たちは、女神の土地で遭遇する、見ず知らずのヒジュラと係わり合うことを厭わない。日常生活の場面であれば、既存のジェンダー規範から外れた得体の知れない存在として、ヒジュラは人々から見下されることが多いが、女神が後ろ盾として存在する聖地では、女神に帰依する者として、ヒジュラはアーシールワダを授与する側に立つことが可能となる。それは、女神という存在が顕在化する聖地の文脈において、ヒジュラと巡礼者との社会的な位置関係が一旦相対化され、女神により近いヒジュラの方がアーシールワダを与える立場に置かれることを示している。この場合のヒジュラの立ち位置とは、既存のジェンダーの分類カテゴリーをもとにした逸脱性を前景化させることなく、その場における二者の関係からヒジュラが獲得するものであり、それは、相対する他者が異なれば、その立ち位置も異なる可能性を含んでいる。そのような「アンセックス化」された束の間の文脈においてアーシールワダを授けるヒジュラは、巡礼者から贈与を受ける対象者となり得るのである。

## 2) 習俗としてのダーナの意義

ヒジュラに対する贈与のかたちは、巡礼者の側が自発的に行うものと、ヒジュラが徴収権を主張するものとに区分できるが、どちらの場合の贈与もダーナ (*dāna*) であるとヒジュラは言い、また、ヒジュラの活動を端で見ている寺院関係者たちもダーナであると言う。サンスクリットに語源をもつダーナとは、与えることを意味する名詞であり、通常は「行う」を意味する動詞アパウン (*āpavn*)、デウン (*devun*)、カラウン (*karavn*) と共に用いられる。ダーナとは宗教儀礼における贈与を指して用いられることが多いが、イギリス支配時代にダーナの意味は拡張され、ヴィクトリア朝のチャリティ観念の影響から俗的な文脈でも用いられるようになったとの指摘もある [Kasturi 2010]。グ

ジャラート地域で暮らす人々の説明によれば、孤児院で暮らす子供たちに寄付を行うことや、牛や鳩に対して食べ物を提供するなど、必要としている人間や生き物に対して自ら一方的に与える行為をダーナと称しており、必ずしも宗教儀礼等における贈与に限定されない。そして、大概是、ダーナを行うことはプンニヤ〔*punya*：善行、功德〕に繋がると語られる。

ヒジュラに対する贈与に関しても、必要としている人に対する慈善行為の一つと見なすことも可能かもしれない。なぜならば、ヒジュラは<sup>こつじま</sup>乞食によって生きる現世放棄者であり、俗世において稼ぎを得る手段が限られているからである。しかし、女神の土地を訪れる人々は、ヒジュラに贈与する際に、救済しようとする素振りを見せることはない。また、巡礼者の中には、困窮するあまりヒジュラの前で涙し助けを懇願する人もいるが、彼らはヒジュラに直接助けを求めているのではなく、女神からのアーシールワダを求めている。つまり、巡礼者たちは、目の前に現前する特定の個人のために贈与するのではなく、女神へと橋渡しをしてくれる三人称複数としてのヒジュラに対して行っているのである。よって、ヒジュラに対する贈与とは、ヒジュラを介した女神に対する贈与であり、個と個の間で交わされる贈与とは異なる。そして、贈与を受ける側のヒジュラも、巡礼者から受け取った施しとは認識せず、女神からの贈与であると主張するのである。

ダーナに関する先行研究では、ダーナとは贈った行為に対する反対給付が期待されない、つまり非互酬的であることが指摘されてきた。例えば、巡礼地のバラナシにおいて調査を実施したジョナサン・パリー(J.Parry)は、特定の個人との間でなされる二者間の贈与行為に着目し、その贈与ダーナについて次のように定義する。ダーナとは、ブラーフマン司祭といった目上の立場にある者への非互酬的な贈与であり、そして、ダーナを行うドナーの側には贖罪としての意義がもたらされる。ダーナを受納するブラーフマン司祭は、ドナーの罪を己の内に蓄積しないためにも本来は毎日長時間におよぶ儀礼を遂行して、さらに、贈られたモノを他のブラーフマンに分配して、ダーナの危険性を最小限におさえなければならない。しかし、それはあくまでも理想であって、現実には、ドナーの罪を受け流す下水道としての役目を果たすことなく、自ら汚水溜めとならざるを得ないという〔Parry 1994：123〕。ただし、すべてのダーナが贖罪の意義を込めて行われているわけではなく、司祭に対する贈与がプンニヤ(善行、功德)として語られることもあるとパリーは指摘する〔Parry 1989：73〕。さらに、現世放棄者に対する贈与にもパリーは言及しており、その場合はビクシャ(*bhiksha*)と称して、司祭に対する贈与とは区別する〔Parry 1989：77〕。

ジャイナ教の僧侶に対するダーナについて論じるジェームズ・レイドロウ (James Laidlaw) は、贈与する者とされる者との非互酬的な二者関係について焦点を当てるが、ダーナを危険なものとする見方を否定する。ジャイナ教の僧侶たちはドナーと個人的な関係を結ぶことがなく、また贈与されたモノはすべて仲間内で分配するため、ドナーに備わる負の要素を背負い込むこともなく、ダーナが危険であるとも考えない。また、施しをする側も、僧侶個人に対する慈善とは考えておらず、そのため、贈与行為を与えるとは表現せずに、器の上にモノを置くと表現する。現世放棄者とは善行を育む上で貴重な土壌であり、その現世放棄者を前にして、人々は自らがドナーとなることで満足するとレイドロウは主張する〔Laidlaw 2000：624〕。

上述した二つの先行研究は、ダーナが互酬性を欠いた贈与であるとする点で一致するが、互酬性を欠く要因に関しては、パリーとレイドロウの見解は異なる。パリーは二者間の贈与行為としてダーナについて議論するのにに対して、レイドロウは、ダーナが特定の個人間で行われる贈与であることを否定する。さらにレイドロウは、ドナーはドナーとなることで満足している点を指摘する。つまり、ダーナという行為の目的ではなく、行為を遂行すること自体の重要性を指摘するのである。

バフチャラー女神寺院に集うヒジュラの間では、巡礼者からのダーナの受納は危険な行為とは認識されてることはなく、また、ダーナを行う巡礼者の方も、相手を危険な目にさらす行為とは考え

ていない。巡礼に贖罪の意義を認める意見も聞かれるが、それは巡礼そのものを善行と見なすためであり、巡礼地において贈り物に負を込めて捨てることによるのではない。

女神の聖地を訪れる巡礼者は、見ず知らずの他人に対して、己の一部であるパイサを差し出す行為を厭わずに繰り返すが、その贈与を受ける対象は、ヒジュラやカマーリヤだけではなく、境内の外で巡礼者を待ち構える貧しい女性や、身体に障害を抱えた人々も含まれる。

他人の前で己の一部を捨て去る行為について、人によって異なる解釈が加えられる余地が残されているが、聖なる文脈においては、ブンニヤという功德を積むことがダーナの意義として語られる。その場合、将来的に女神からのアーシールワダを得ることが期待されるわけだが、しかし、巡礼者たちは己の利益のために必死にパイサを散蒔いているわけではない。レイドロウが主張するように、ダーナを遂行する人々は、ドナーとなること自体に意義を見いだしている。よって、反対給付をあてにした行為とは言い難い。たとえ、将来的にアーシールワダが得られなかったとしても、ダーナを受け取った女神、あるいはヒジュラが咎められることは決してない。むしろ、人々は再び巡礼地を目指し、己の信ずる女神に対してダーナを遂行し続けるのである。

## V. 贈与の輪

互酬的な贈与行為には贈与と返礼の間に時間的隔たりが生じるが、ピエール・ブルデューは、その隔たりには互酬的構造を隠蔽する効果があると指摘する[ブルデュー 2007:218-9]。つまり、時間という遮蔽物によって、贈与と返礼とがそれぞれ完全に独立した単独行為として成り立ち、返礼が返礼として認識されない効果を生むと主張するのである。このような互酬性の構造に関するブルデューの議論は大変興味深い。しかし、それは互酬性のルールに基づいた、閉じた贈与の輪の中の人間関係において見いだされる贈与の意義である。それに対して、女神に対する贈与の場合、人間と女神とは関係し合うことができるかどうかとも不確かであり、贈与の輪が存在することを前提にすることは難しい。女神に対する贈与行為とは、その不確かな関係を既知なるものとして想定し、実感する唯一の手段なのではないだろうか。そもそもダーナとは非互酬的な単独行為であり、そのダーナを継続することにおいて、人は女神との互酬的な関係を思い描くことが可能となり、その行為を通じて女神への信仰も継続する。さらに、その贈与を成立させるためには、全くの他人の存在が必要であり、女神の聖地においてはヒジュラがその立ち位置にあるのである。

### 【参考文献】

- ブルデュー、ピエール、2007 (1994) 『実践理性-行動の理論について』 藤原書店
- Cohen, L., 1995, 'The Pleasures of Castration: The Postoperative status of Hijras, Jankhas and Academics,' in P.R. Abramson and S.D. Pinkerton (eds.), *Sexual Nature, Sexual Culture*, Chicago, London: University of Chicago Press.
- Kasturi, Malavika, 2010, 'All gifting is sacred': The Ssanatana Dharma sabha movement, the reform of dana and civil society in late colonial India,' *The Indian Economic and Social History Review*, 47, 1 pp.107-39.
- 國弘暁子、2008 「異装が意味するもの：インド、グジャラート州におけるヒジュラの衣装と模倣に関する研究」『非文字資料研究の可能性：若手研究者育成成果論文集』 神奈川大学21世紀 COE プログラム 研究成果報告書
- 2009 a 『「ストリート」を経験する—ヒンドゥー女神バフチャラー信仰とヒジュラ』 関根康正 (編) 『ストリートの人類学』 上巻、国立民族学博物館調査報告、80号、pp.289-312
- 2009 b 『ヒンドゥー女神の帰依者ヒジュラ：宗教・ジェンダー境界域の人類学』 風響社

- Nanda, Serena, 1999 (1990), *Neither Man nor Woman : the Hijras of India*, Belmont, CA : Wadsworth.
- 1996, Hijras : An Alternative Sex and Gender Role in India, Gilbert Heards (ed), *Third Sex Third Gender : Beyond Sexual Dimorphism in Culture and History*, New York : Zone Books.
- Pande, Alka, 2004, *Ardhanarishvara : The Androgyne : Probing the Gender Within*. New Delhi : Rupa.
- Parry, Jonathan, 1989, On the moral perils of exchange, In J. Parry and M. Bloch (eds), *Money and the morality of exchange* : Cambridge University Press.
- 1994, *Death in Banaras*, Cambridge : Cambridge University Press.
- Reddy, Gayatri, 2005, *With Respect to Sex : Negotiating Hijra Identity in South India*, Chicago, London : The University of Chicago Press.
- Roscoe, Will, 1996, How to Become a Berdache : Toward a Unified Analysis of Gender Diversity, Gilbert Heards (ed), *Third Sex Third Gender : Beyond Sexual Dimorphism in Culture and History*, New York : Zone Books.
- 1998, *Changing Ones : Third and Fourth Genders in Native North America*, New York : St. Martin's Griffin.
- Weston, Kath, 2002, *Gender in Real Time : Power and Transience in a Visual Age*, New York and London : Routledge.